

3月11日

2020.3.11

3月11日がまたやってきた。あれから数えて9回目の3月11日となる。今回の3月11日は水曜日である。にもかかわらず学校には生徒がいない。14時46分には、教職員だけで黙祷を捧げることになる。

今の高校1年生は、震災当時、小学1年生であった。同様に高校2年生は、小学2年生だった。小学校低学年では、大人でも狼狽するような揺れである。さぞかし怖かったことだろう。本校のすぐ隣には梁川中学校の校舎がある。また、数年前までは本校の北側には梁川小学校の校舎があった。今では空き地になっている。

あの当時、震災後、梁川小学校の校舎は使えなくなった。梁川小学校の児童は、梁川高校と梁川中学校とに分かれて学校生活を送ることとなった。しばらくして、プレハブ校舎に移った。その後は現在の梁川小学校に移った。新しいりっぱな校舎である。卒業式は新しい校舎で行われた。梁川小学校の児童のはずであるが、学び舎である校舎は4回かわっていることになる。子どもたちも落ち着かず大変だったことだろうと思うが、先生方もさぞやご苦労されたことだろう。

梁川小学校だけでなく、県内の多くの学校が非常事態であった。通常の学校生活を送ることができなかった。あの当時、私が勤務していたところには相馬農業高校飯館分校があった。体育館を仕切って教室にしていた。相馬農業高校飯館分校の生徒たちは、そのような状況のもとで授業を受けていた。どのような思いで高校生活を送っていたのだろうか。彼らは、その後どのような人生を歩んでいるのだろうか。きっと震災への思いは人一倍強いにちがいない。

2011年、平成23年はずっと落ち着かなかった。あの頃は、10年後、福島はどうなっているのだろうかと思いを巡らせたものである。それが、明日になると10年目を迎える。「復興」という言葉にもすっかり慣れた。それまでは、歴史の授業でルネッサンスを文芸復興と習ったくらいだった。復旧とも復活とも違う。もはや復興は、福島の合言葉になっている。

福島は、日本では福島だが、世界的にはあのときから「フクシマ」になった。数年前、娘に生まれ故郷を見せようとイタリアを旅したことがあった。レオナルド・ダ・ヴィンチ空港（ローマ）に降り立ち、レンタカーを借りようと事務所の受付カウンターにいった。書類に住所を書いた。ローマ字で“FUKUSHIMA”と書いたところ、担当の方がイタリア語で「フクシマなの。大変ね。～」のようなことを話しかけてきた。このとき初めて、我がふるさと福島が国際的な場所、フクシマになってしまったことを実感した。

今の復興の姿は、皆さんが9年前にイメージしていたものと比べてどうであろうか。予定通りなのか。それとも遅れているのか。あるいは、だいぶ遅れているのか。予定よりも進んでいるということはないだろう。このタイミングで『Fukushima 50』という映画が公開になった。私の好きな渡辺謙と佐藤浩市が主演である。こういった映画が世に出るのに9年という歳月が必要だったということか。この映画とともに震災後10年目を迎えようということか。いずれにせよ、明日からの1年間を今まで以上に大切なものにしなければならない。

梁川高校の生徒諸君、どのような思いをもって本日、3月11日を迎えたであろうか。多くの生徒は自宅にいることと思うが、14時46分にはそれぞれの場所で黙祷を捧げてほしい。